

国 語

(1 期)

国語（1期）

第1問

次の文章（文章A・B）は、渡邊雅子『論理的思考とは何か』からの抜粋（文章Aは第1章、文章Bは第2章のそれぞれ一部分）である。これらの文章を読んで、後の問いに答えよ。

〔文章A〕

グローバル化が進み、世界共通のビジネスモデルや教育モデルが示される一方で、文化の衝突は思わぬところで起きている。衝突の影響は極めて深刻なのだが、その実態は見えにくく、意識されずに過ぎてしまうことが多い。たとえば母国で優秀な成績を

修めた学生が、海外の大学でつまずくことがある。言語や教育方法の違いがつまずきの理由に挙げられがちだが、母国と留学先の作文／小論文の「論理の展開の違い」に根ざした、思考法の違いが原因であることも多い。

この文化による論理展開の違いをいち早く指摘したのは、アメリカの応用言語学者カプランである。カプランは、大学で留学生の小論文指導を行うなかで、英語が上達してもなかなか小論文が上達しない留学生が多いことに長年疑問を持っていた。そこでカプランは世界三〇カ国以上から来た留学生の小論文を分析し、図のように言語圏別に論理の展開の特徴を

甲

に分類してみた。

カプランの分類によれば、英語圏は「直線的」な展開、ヘブライ語やアラブ語などのセム語圏は類似することがらを詩の対句のように「平行」させて進む展開、東洋は渦巻きのように主題から遠いところより始めて「間接的に主題に近づいていく」展開、フランス語に代表されるロマンス語圏は余談

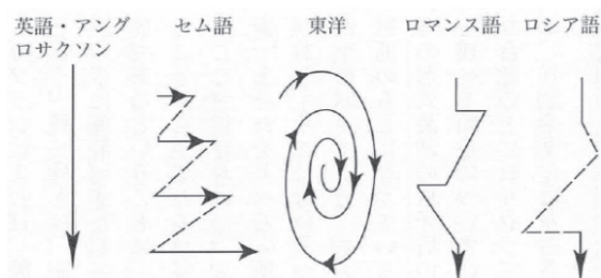


図 言語圏による論理展開のパターン

を交^aえて「乙」しながら進む展開と分析されている。そして五つめのロシア語圏は、パラグラフ（段落）の間のつながりがパターン化できないとされている。アメリカ人のカプランにとってロシア語圏の学生の論理展開の解釈が困難だった理由としては、ロシア語圏では美辞^b レイクと慣用的な表現を使って儀式的に書いたり語ったりする伝統的な^ア レトリックが広く用いられていること、また政治的な理由で意見の直接的な表明が差し控えられることなどが考えられる。論理的というと、英語圏の直線的な論理展開が自明で普遍的なものを受けとめられているが、カプランの分類を見ても、いくつかある型のひとつにすぎないことが分かる。

カプランによれば、読み手が「論理的である」と感じるには、統一性と一貫性が必要であるという。統一性とは、記述に必要な要素があることであり、一貫性とは、それらの要素が読み手に理解可能な順番で並んでいることである。これらを総合すると、論理的であるということは「読み手にとって記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」と定義することができる。【1】

ここで重要なのは、「読み手にとって」という部分だ。世界に共通する普遍的な「必要な要素」とそれを並べる「順番」があるわけではなく、読み手がその社会・文化の中で馴染んだ型があり、そこにはいくつかのパターンが認められるということである。カプランが図で示した四つのパターンは、その型を 甲 に表現したものだった。「矛盾のないこと」が論理学の三原則のもとになっているように、前後の内容に矛盾がないことが作文でも重要である。しかし、その形式論理の無矛盾の原則を守った上で、読み手と書き手の間に作文に必要な要素とそれらを述べる順番についての合意が必要だということである。つまり論理的であることは、社会的な合意の上に成り立っているものだといえる。

I 文化圏によって違いが現れる。それは、言語や文化に左右されない論理学の形式論理とは異なる〈論理〉の考え方である。【2】

カプランは、「それぞれの文化は文化に特徴的なパラグラフの順番を持ち、言語のこの部分の習得は、その文化の論理システムを学ぶことに他ならない」と述べている。このカプランの主張を各言語の文法の構造とパラグラフの構造の類似から根拠づける人も

あるが、「必要な要素とそれを並べる順番」は文法という言葉の内的システムのレベルではなく、レトリックが扱う作文／小論文の型（「構造／配置」）のレベルで考えた方がより有益である。各言語の文法の違いが論理の違いの理由だとすると、私たちは異文化で暮らしても母語の影響からずっと逃れられないことになる。【3】

カプランは英語で書かれた留学生のエッセイを分析したために、言語圏別に「直線的」、「平行」、「間接的」、「乙」の四つの論理展開のパターンを特定した。しかし論理のパターンに注目して文化を分類する方法は、言語や国という単位の他にも考えられる。たとえば、どの国（社会／共同体）にも共通して存在しているのが、政治、経済、法、社会という領域である。これらの領域には領域独自の目的と目的達成の手段が存在しており、それらを混ぜて使うことはできない。混ぜて使おうとすれば、道徳的な警鐘が鳴る。【4】

たとえば、^B経済領域では効率的に最大限の収益を上げることが目的とするが、この目的を政治領域に持ち込むと汚職となり、法領域では違法となり、社会領域では不道徳となる場合が生じうる。このように四つの領域は独立して存在しているが、どの領域の論理と価値観を重視しているか、Ⅱ 国の統合の原理として採用しているかは、教育、とりわけ学校で教える作文を通して判断することができる。なぜなら、教育は知識や技術を教えるのみならず、当該国の伝統や価値観の伝授を重要な目的として持っているからである。【5】

学校は人間形成という明確な目的を持ち、その目的に向かって子どもを形成（教育）する力が系統的に強く働いている。そのため、子どもたちが将来参加していく社会で正しいとされる行為の型やその背後にある規範、価値観がより明らかな形で現れる。もちろんひとつの国の中でも、地域によって、階層によって、異なる言語や習慣を持つ ^イエスニックな共同体によって多様な文化が存在している。しかし、そうした複数の文化的な集団によって構成されている国が、ひとつの国家（社会）として成り立つためには、統合する文化が必要であり、一般には支配層の文化が主流文化として学校（公教育）で教えられていると指摘されている。

〔文章B〕

経済領域は、効率的に最大の収益を上げることを目的とする。その目的の確実な達成のために、計算に基づく比較考量により複数の選択肢の中から最も効率的かつ費用対効果の高い手段を選ぶ。経済領域のレトリックは「効率的か否か」が主導的な観点となる。学校で教える作文では、目的達成までの時間、つまり結論に達するまでに必要とされるステップの短さに効率性が現れる。

経済原理のレトリックを代表すると思われるアメリカの五パラグラフ・エッセイは、証拠を挙げて主張の正しさを証明し、^c読み手を説得することを目的とする。このエッセイの最大の特徴は、最初の段落（パラグラフ）で結論となる主張が提示されることである。私たちが思考する時には、観察やデータの分析から徐々に結論に向かって推論を進めていくが、それをエッセイの型で書くには、結論を先に述べて実際の思考の過程を倒立させる。

エッセイの効率性は、冒頭で「結論」となるべき主張が先取りして提示されるエッセイの目的論的な構造に起因する。最初に到達すべき終着点が示されるため、主張に関係のない情報が入りづらい。「主張の論証」という目的に向かって、主張を支持する「事実」を三つに制限してコンパクトに論じる。主張の根拠となる三つの事実の間の関係を論じる必要もない。結論へのステップの短さもさることながら、そもそも結論が冒頭に示されているため、読み手はすばやく書き手が何を言いたいかをつかむことができる。このエッセイの構造はよく的を^cイ^cる矢にたとえられる。「主張」というイ^cるべき的が冒頭に示され、的に向かって最短の距離で一直線に飛んだ矢が、的の真ん中に命中するイメージである。〔文章A〕で紹介したカプランの図の矢印（図）がまさにそれを示している。

このエッセイの全体構造は、エッセイのパラグラフの構造にも同じ形で反映されている。全体と全体を構成する要素が同じ論理で貫かれているので、それが論理の一貫性と分かりやすさに貢献している。

エッセイの肝となる「主張」は、主題文と呼ばれてエッセイの冒頭に置かれ、あとに続くパラグラフではその主張を支持する具体的な事実が述べられる。同様に、エッセイを構成する各パラグラフも、冒頭にそのパラグラフの^dガイ^dヨウが一文でまとめられ

であり（トピック・センテンスと呼ばれる）、その後在具体例で説明する文が続く。トピック・センテンスはパラグラフのどこにも現れる可能性があるが、多くはパラグラフの冒頭に置かれるため、各パラグラフの冒頭の一文を拾って読んでいけば、全体の内容がすぐに理解できるようになっている。

Ⅲ、各パラグラフの最後は、そのパラグラフの主張を短くまとめた小結論で締めくくられる。エッセイの直線的な論理展開と効率性、明快さは、この全体の構造と部分の構造の一致によって担保されている。

アメリカ式エッセイに馴染んだ者が、彼らにとって自明のこの入れ子構造を予想して作文を読み、その期待が裏切られた時、「つながりが分かりづらい」、「主張がばやけている」、「きちんと論証されていない」作文である、つまり「論理的でない」と怒りにも似た感情が瞬時に起こるのは、この構造に込められた仕掛けの単純明快さからも理解できる。

作文教育研究で著名なモフエット (J. Moffett) は、主題を提示する文がどこに現れるかによって作文構造を二つに大別した。主題提示文が最初に現れるものを「演繹的」作文と呼び、最後に置かれるものを「帰納的」作文と呼んだ。この分類によれば、アメリカのエッセイは、演繹的作文である。演繹的作文の完成度は、主題提示文である主張を頂点とした明確な「序列」の堅固さによって測られるという。つまり段落や文章は、主題に直接関係する最も重要な情報から、より詳細な補助的な情報へと並ぶ構造になっている。主張を支持する三つの事実も、最も強く主張を支持すると考えられる事実から順番に並べる。もとの事実の順番がつかない以上、どのように並べてもよいのだが、無自覚に列挙するのではなく、「主張の支持」という目的に照らして最も効果的な配列を考えることが求められている。

エッセイは、「前提」となる主張が最初にぼんと置かれて、そこから具体的事実を判断する演繹に似た形を取る。Ⅳ 論理学における演繹的推論の手続きそのものではないため、日本ではこの配置を「頭括型」——最初に主張を置き次に具体例で説明する構成——と呼ぶのが一般である。ちなみに、主張Ⅱ結論を最初に置く頭括型は、四カ国の作文のうちエッセイのみであり、残り三カ国の作文はすべて尾括型——主張が最後に置かれる——の構成である。

この頭括型の書き方は、放っていて自然にできるわけではなく、意識的な訓練が必要である。Ⅴ、エッセイの型で書くに

は、先に述べたように実際の思考過程を倒立させなければならぬからである。そこで、アメリカでは小学校一年生から「私は……と考える。なぜならば……（I think.. because...）」と定型化された言い方で意見を述べる訓練を行う。そしてこの意見表明の方法がそのまま書き方の型になっている、オピニオン・ピースと呼ばれる簡単な「意見文」を書く訓練を行う。「私はこう考える。なぜならば」という言い回しが習慣化され、

丙

五パラグラフ・エッセイで主張の正しさを証明する根拠には、科学的なデータや統計の数字、歴史的事実などの経験的な事実が好んで提示される。経験的な事実はその自体に議論の余地を残さず、またその正誤も検証可能であるために、主張を論証する材料として適切かつ強力なものだと考えられている。

エッセイの論証の適切さ、つまり証拠の適切さをチェックする際には、科学の仮説検証で用いられる「信頼性」と「妥当性」がよく引き合いにだされる。仮説検証における信頼性とは、同じ条件のもとで第三者が同じ実験／調査を繰り返して同じ結果が得られることを指し（データの信頼性）、妥当性は調査方法が確かに仮説を検証していること、つまり仮説とデータが因果関係で結ばれていること（調査方法の妥当性）を指す。翻^eってエッセイの論証における信頼性とは、主張を支持する事実／情報に誰でもアクセスして確認できることにあり、妥当性は、事実／情報が確かに主張をサポートしていることである。エッセイでは根拠に当たる情報のチェックをこれら二つの基準で行うことで、科学の仮説検証と同じような客観性や厳密性を論証に与えようとしている。

問一 線部 a ～ e について、カタカナは 部が同じ漢字であるものを、漢字は読みがなを、各群の ① ～ ⑤ からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号

1

5

a 交えて

- ① くわ
② こしら
③ たずさ
④ まじ
⑤ おさ

c イる

- ① 交通をシャダンする
② ヨウシャなく追及する
③ 暴言をチンシャする
④ 材料をシュシャする
⑤ 目標がシャテイに入る

e 翻って

- ① とどま
② ひるがえ
③ いすわ
④ さかのぼ
⑤ うらがえ

b レイク

- ① 選手団をゲキレイする
② 上官にケイレイする
③ タンレイな顔立ち
④ テイレイの会議
⑤ ヨレイが鳴る

d ガイヨウ

- ① キガイのある新人
② 政府の失政をダンガイする
③ カンガイにふける
④ ケイガイ化が進む
⑤ ガイトウで演説する

問二 空欄 甲・乙 を補うのに最も適切な言葉を、各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号 6・7 (甲…6、乙…7)

甲 ① 制度的 ② 一般的 ③ 観念的 ④ 恣意的 ⑤ 視覚的

乙 ① 紆余曲折 ② 思慮分別 ③ 軽挙妄動 ④ 新陳代謝 ⑤ 悪戦苦闘

問三 〰線部ア・イの本文中における意味として最も適切なものを、各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号 8・9 (ア…8、イ…9)

ア レトリック

① 情報を懇切丁寧に伝えるための技法
② 書き手の意図を表現するための技法
③ 文章表現の効果を高めるための技法
④ 誰もが簡単に文章を書くための技法
⑤ 物事の本質を端的に示すための技法

8

イ エスニック

① 伝統的な
② 異端的な
③ 呪術的な
④ 因習的な
⑤ 民族的な

9

問四

空欄

I

V

を補うのに最も適切な言葉を、次の①～⑧からそれぞれ一つずつ選べ（同じものを繰り返し用いてはならない）。

解答番号

10

14

(I…10

、II…11

、III…12

、IV…13

、V…14

)

- ① そして
- ② たとえば
- ③ むしろ
- ④ なぜなら
- ⑤ まして
- ⑥ しかし
- ⑦ だからこそ
- ⑧ つまり

問五

空欄

丙

を補うのに最も適切な文を、次の①～⑤から一つ選べ。

解答番号

15

- ① 思考法として確立しても、エッセイとは同日の論ではない
- ② 思考法として習得すれば、エッセイに一矢を報いることができる
- ③ 思考法として完成しなければ、エッセイは水泡に帰してしまう
- ④ 思考法として定着すれば、エッセイまでは一足飛びである
- ⑤ 思考法として掌握しても、エッセイの向こうを張ることはできない

問六 「文章A」中に傍線部A「母国で優秀な成績を修めた学生が、海外の大学でつまずくことがある」とあるが、留学生がアメリカ

カの大学でつまずいてしまうのはなぜか。その説明として、最も適切なものを次の①～⑤から一つ選べ。

解答番号 16

- ① 演繹的推論の手続きを忠実に踏まえて書かれた演繹的作文が存在していることを知らず、帰納的な文章を書いているから。
- ② 言語や文化に左右されることのない論理学の形式論理を身につけることなく、母国の論理と思考法を使い続けているから。
- ③ 大学では経済領域のレトリックを駆使すべきなのに、他の領域のレトリックを持ち込み、不道德であると思われるから。
- ④ 言語や文化により思考法が異なっているが、最も論理的であるアメリカの直線的な展開で思考することができないから。
- ⑤ アメリカ式のエッセイを書く訓練を受けていない学生が、母国の論理展開で文章を書き、分かりづらいと判断されるから。

問七 「文章A」中に傍線部B「経済領域では効率的に最大限の収益を上げることが目的とする」とあるが、この目的を達成するた

めには、どのような文章を書く必要があるか。「文章B」の内容を踏まえた説明として、最も適切なものを次の①～⑤から一つ選べ。

解答番号 17

- ① 最初のパラグラフに単純明快な内容を持った結論を示し、その結論を支持する事実をその後に列挙していく文章。
- ② 全体においてもパラグラフにおいても、主題を最初に提示し、読み手に効率的に言いたいことをつかませる文章。
- ③ パラグラフの冒頭に必ずトピック・センテンスを置き、その後に例など、より詳細な補助的な情報を並べる文章。
- ④ 直線的な論理展開と効率性、明快さを併せ持った構造で、小学一年生でもなんなく書くことが可能である文章。
- ⑤ 観察やデータの分析をまず詳細に行ったのち、そこから徐々に結論に向かって推論を丁寧に積み上げていく文章。

問八 「文章B」中に傍線部C「読み手を説得する」とあるが、どのように説得するのか。その説明として、最も適切なものを次の

①～⑤から一つ選べ。

解答番号 18

- ① 正しいことが論理的に証明されている普遍的な法則を用いて、真偽を確定することにより説得する。
- ② 同じ条件のもとで同じ実験や調査を繰り返し、同じ結果が出たことをデータで示すことにより説得する。
- ③ 仮説とデータが因果関係で結ばれており、調査方法が妥当であることを証明することにより説得する。
- ④ 仮説検証における信頼性と妥当性を併せ持つことで、主張を科学的に立証することにより説得する。
- ⑤ 容易に確認できて、主張を確かに支持することができる経験的事実を提示することにより説得する。

問九 次の文は、もともと「文章A」の中に記されていたものである。この文が入るべき最も適切な箇所を後の①～⑤から一つ選べ。

解答番号 19

しかしレトリックのレベルで考え、異文化の書く型を使いこなすことによって、異なる論理と思考法を手に入れることができる。

- ① [1]
- ② [2]
- ③ [3]
- ④ [4]
- ⑤ [5]

問十 「文章A」・「文章B」を読んだ後に、生徒が意見を発表している場面である。「文章A」・「文章B」の内容に合致しないものを、次の①～⑥から二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号

20

21

① 生徒A——私たちも大学入試のときや、大学に入ってからでも小論文を書かなくてはいけないことがあるよね。そのときは、直接的な展開をするアメリカ式のエッセイを書かなくては評価されないってことになるね。

② 生徒B——私たちのほとんどはアメリカの大学ではなく日本の大学に進学するんだから、別にアメリカ式のエッセイを書かなくてもいいんじゃないかな。直線的ではなく間接的に主題に近づくような文章も論理的なんだよ。

③ 生徒C——でも、これからの世の中は、経済領域だけではなく、さまざまな領域でも効率的であることが求められると思うわ。だから、日本でもこれからはそのような世の中に対応する教育をするべきなんじゃないかな。

④ 生徒D——学校では単に知識や技術を教えるだけではなくて、その国の文化や伝統や価値観を教える役目があるんじゃないかな。日本って国がどのような価値観を持った国であるかも、作文を書くことによって分かってくるのかな。

⑤ 生徒E——そうかもしれないけど、これからは、さまざまな国や民族の人たちがやってきて、日本という国を構成するようになってくるんじゃないかな。そうなるの一つの国家として成立するためには、統合する文化が必要になるかもしれないね。

⑥ 生徒F——そのためには「論理的である」ということも唯一絶対的な論理展開があるわけじゃなくて、また、普遍的に必要な要素や並べ方があるわけじゃないってことが分かっただけでもよかったね。でも、アメリカって定型化された言い方で主張する訓練をしているんだね。

第2問

次の各問いに答えよ。

問一

Tさんは、ある漢字の書き取りの問題について、次のような過程によって解答を決定した。

(問題)

- ア 国民の期待をソウケンに担う。
イ ごソウケンでなによりです。
ウ 奈良時代のソウケンになる寺。
エ 容疑者をソウケンする。

(解答の過程)

辞書で「ソウケン」という項目を調べたところ、解答の候補として次のような熟語とその意味の説明を見つけることができた。

・「壮健」…体が丈夫である。

・「総見」…Ⅰ

・「送検」…Ⅱ

・「創建」…初めて建物をつくること。

・「双肩」…Ⅲ

これらから、

アⅡ「a」、イⅡ「b」、ウⅡ「創建」、エⅡ「c」と解答を決定できた。

(1) 空欄 I Ⅲ を補うのに最も適切なものを、次の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ(同じものを繰り返し用いてはならない)。

解答番号 22 24 (I…22、II…23、III…24)

- ① 演劇や相撲などを関係者が打ち揃って見ること。
- ② 検察官が裁判所に公訴を提起すること。
- ③ 責任や任務を負うもののたとえ。
- ④ 今までにない新しい意見。
- ⑤ 事件を警察から検察庁へ移すこと。

(2) 空欄 a c を補うのに最も適切なものを、次の①～④からそれぞれ一つずつ選べ(同じものを繰り返し用いてはならない)。

解答番号 25 27 (a…25、b…26、c…27)

- ① 送検
- ② 壮健
- ③ 総見
- ④ 双肩

問二 次のa～dの文の傍線をつけた部分を漢字に直した場合、正しいものを各群の①～④からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号 28 31 (a… 28、b… 29、c… 30、d… 31)

a ジギ|を得る

28

④ ③ ② ①
技 宜 戯 儀

b 人生のテンキ|

29

④ ③ ② ①
帰 岐 期 機

c 好評をハク|する

30

④ ③ ② ①
泊 白 博 迫

d 音楽にゾウケイ|が深い

31

④ ③ ② ①
敬 詣 啓 恵

〔以下余白〕